

ユネスコスクール活動事例集

第 3 集



愛知県教育委員会

目 次

ユネスコスクール 活動事例①	名古屋市立神の倉幼稚園	2
ユネスコスクール 活動事例②	一宮市立浅井北小学校	4
ユネスコスクール 活動事例③	長久手市立東小学校	6
ユネスコスクール 活動事例④	豊橋市立大清水小学校	8
ユネスコスクール 活動事例⑤	安城市立里町小学校	10
ユネスコスクール 活動事例⑥	名古屋市立内山小学校	12
ユネスコスクール 活動事例⑦	豊橋市立五並中学校	14
ユネスコスクール 活動事例⑧	岡崎市立新香山中学校	16
ユネスコスクール 活動事例⑨	愛知教育大学附属岡崎中学校	18
ユネスコスクール 活動事例⑩	名古屋国際中学校・高等学校	20
ユネスコスクール 国内交流派遣①	半田市立板山小学校	22
ユネスコスクール 国内交流派遣②	豊田市立藤岡南中学校	24
ユネスコスクール 国内交流派遣③	愛知県立愛知商業高等学校	26
	愛知県ユネスコスクール交流会	28

はじめに

ユネスコスクールは、1953年、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するために発足し、その数は、世界181か国で約1万校を数えます。日本においては、2015年6月現在、939校が加盟承認され、そのうちの160校が愛知県の学校です。愛知県にユネスコスクールが多いのは、「国連持続可能な開発のための教育の10年」の最終年にあたる2014年11月、「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」が名古屋市内で開催されたことが背景にあります。ただ、それ以上に、県内の各学校で、教育振興基本計画や学習指導要領に明記された、持続可能な社会づくりの担い手を育てる取組が先進的にすすめられてきていたことが、その大きな基盤であるに相違ありません。

愛知県教育委員会では、今年度、ESD推進拠点としての責務を果たすべく実践を重ねるユネスコスクール及びその加盟申請校に向けた支援事業を実施しました。具体的には、ESD推進のために必要な研修講師等の学校への派遣[※]や児童生徒の県外ユネスコスクールへの派遣、日々のESDの成果を共有し合うユネスコスクール交流会の開催、そして、本活動事例集の作成です。

「ユネスコ世界会議」後の2015年以降について、ESDの取組の推進・拡大が国連総会で承認され、現在、世界各所で新たな取組が始められています。絶え間なく続く紛争や気候変動をはじめとした諸問題への危惧から起こる、持続可能な社会づくりへの期待は、今後、国内外で益々高まっていくものと思われます。本事例集が、ユネスコスクールへの加盟の有無を問わず、全ての学校のESDの充実と広がりにつながるとともに、望ましい未来を切り拓く子どもたちの力を育む契機となることを願うばかりです。

結びに、本事例集作成にあたり、御協力いただきましたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会をはじめとした関係の皆様にご心より感謝を申し上げます。

※講師等の派遣についての概要は、愛知県教育委員会ホームページを御参照ください。
(<http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/55017.pdf>)

平成28年3月

愛知県教育委員会

名古屋市立神の倉幼稚園



創 立：1977年
 住 所：〒458-0812 名古屋市緑区神の倉四丁目210番地
 連絡先：TEL 052-876-6490 FAX 052-877-9869
 学級数：5 園児数：115人
 H P：http://www.kaminokura-k.nagoya-c.ed.jp



育てよう小さな命、探そう自然の不思議

はじめに

本園は名古屋市の東部に位置し閑静な住宅街にある。最近では、自然豊かだった周辺の環境も変化し、身近な自然に触れる機会が減りつつある。そこで、「育てよう小さな命、探そう自然の不思議」をプロジェクトテーマに、昨年度からESDの活動に取り組んでいる。

幼児は、身近な環境に好奇心や探究心をもって主体的

にかかわり、自分の生活や遊びに取り入れていくことを通して発達していく。子どもたちには、身近な自然に触れて遊ぶことでその美しさや不思議さに心を動かし、自然環境に心を寄せながら感性豊かに生活してほしいと願っている。今年度は、園内の環境を見直しつつ、地域の自然環境を体験活動に生かしながら実践を重ねている。

実践内容①

『『秘密の種』を育ててみよう』

ねらい：野菜の栽培体験を通して、気づきを伝え合いながら植物の生長を楽しみに世話をする

学年ごとに身近な場所で野菜作りをし、子どもたちが野菜の生長を感じたり興味・関心をもって世話をしたりできるようにしている。中でも5歳児は、1学期に夏野菜を種から育て、そのうち1種類は『秘密の種』として名前を知らせず育てた。生長の過程で、子どもたちは驚きや発見など様々な気づきを言葉や絵で表現していたので、教師も生長の様子を写真や絵で分かりやすく表示した。夏野菜の生長が友達との共通の話題になり、『秘密の種』の葉の匂いからトマトであることがクラスに広がり、大切に世話をすることができた。

2学期には、国際ESDセンターの先生方のアドバイスを受け、秋まき野菜の『生長カレンダー作り』に取り組んだ。当初は、秋まき種2種類に『不思議な種』『魔法の種』と



名付け、B紙に写真を貼ったり子どもが気付いたことを自由に書き入れたりする簡単なものだった。センターの先生方から、文字の書けない幼児でも気軽に表現できるように、教師がつぶやきを代筆したり、幼児が調べた内容を一緒に掲示したりするとよいことを教えていただき、幼児が参加しやすいよう工夫した。また、カレンダーの表示を下から上へ生長に合わせて書き加えていくようにすることで、生長の喜びを感じられるようにした。関心が薄かった子どもも、次第に、「大きくなったね」「何になるか楽しみ」と話したり、自分の絵を貼ることを喜んだりするようになった。また、収穫した野菜を汁物にして食した時、「シャキシャキしてる」「ざらざらした感じ」と、大根菜と小松菜の食感の違いに気づき、美味しそうに食べる姿も見られた。



みんなの発見が『生長カレンダー』になったよ

成果

何の種かあえて知らせず、子どもたちと命名して育てたことで、種まきから収穫まで関心をもって世話をすることができた。また、カレンダー作りでは、子どもたちが絵やコメント等で自由に表現し参加できるよう工夫したことで、小さな変化を伝え合い、気づきを深めることができた。

実践内容②

「熊野社で季節の移り変わりを感ぜよう」

ねらい：地域の自然に触れながら、自然への興味・関心を深めたり、不思議さを感じたりする

神の倉幼稚園の近くには、手付かずの自然がそのまま残っている「熊野社」がある。5歳児は年に5回、熊野社へ散歩に出掛け、季節の移り変わりや季節ごとの自然を、諸感覚を通して感じる直接体験を重ねている。

春：桜の下で花見をしながら弁当を食べたり、舞い散る花びらを追いかけてたりして桜の美しさを実感した。

秋：紅葉を見たり落ち葉やドングリ、木の実等を拾ったりして、秋の自然に親しんだ。環境カウンセラーを講師に

迎え、現地で諸感覚を十分に働かせ、季節の変化や様々な事象に気付いたりかかわったりすることができるような指導を受けた。

冬：春の訪れを探しながら、これまでの熊野社の様子を思い出したり、身近な自然も変化しながら1年を過ごしていることを知ったりして、身の回りの自然や生物の生命力を感じた。



落ち葉のにおい、土のにおいに似てるね

成果

1年間の取り組みを通して、身近な草花や木の実、虫などへの関心が深まり、友達と名前や生態を調べたり、ごっこ遊びや製作の材料に取り入れたりする姿が増えた。ワクワクとする感動体験が幼児の好奇心や探究心の育ちにつながった。

実践内容③

「みるくちゃんのおもいで」

ねらい：生き物の飼育体験から、生きている物への親しみや愛着をもち、生命の大切さに気付く

4月の入園、進級当初は、環境の変化から不安になる幼児がいる。しかし、先生や友達と一緒に小動物に話しかけたり触ったりすることで、気持ちが和らぎ安定する姿がよく見られる。5歳児は担任と一緒にウサギの『みるくちゃん』の飼育当番をし、『みるくちゃん』も自分たちと同様に食事や排便をすることや清潔にすることの大切さに気付いて世話をしてきた。

10月、『みるくちゃん』が高齢から体調を崩し、翌月、永眠した。そのことをどのように子どもたちに伝えるか教

師間で話し合い、子どもたちが保護者とともに別れができる場

を設定した。生きているときのように動かない『みるくちゃん』を見て、元気なときの様子を思い出して話したり、寂しい気持ちを共感し合ったり、命の大切さを感じたりする姿が見られた。後日、A児は「みるくちゃんのおもいで」の絵本を作り園に持ってきた。



みるくちゃん、お見舞いにくだよ。早くよくなってね！

成果

5歳児は、当番でウサギやインコの世話をするようになり、生き物への愛着や継続して世話をすることの大切さを感じるようになった。だからこそ、大好きなウサギの死はつらい経験だったが、生き物の命の大切さを改めて感じていたと思われる。

おわりに

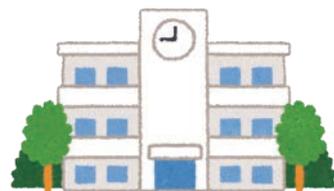
本園では、小動物や昆虫等を子どもたちと飼育したり、昆虫が好む植物を育てて自然環境を整えたりしている。また、季節ごとの身近な自然に親しむ活動を教育課程や指導計画に位置づけている。自然との心がわき立つような出会いを計画的に積み重ねていくことで、幼児の好奇心や探究心、“もっと知りたい”という意欲が育つよう実践を積み重ねている。

今後も、子どもたちが諸感覚を豊かに働かせ、身近な自然とのかかわりを深める体験活動を原体験として、生涯にわたり自然環境に心を寄せて生活していく子どもたちを育てていきたい。また、取り組みを保護者や地域にも発信し、ともに活動に取り組むことができるような基盤づくりにも努力していきたい。

一宮市立浅井北小学校



創立：1873年
住所：〒491-0143 一宮市浅井町大野字南土山75番地
連絡先：TEL 0586-28-8715 FAX 0586-51-0036
学級数：15 児童数：346人
HP：http://www.school.city.ichinomiya.aichi.jp/~azaiki-e/



地域といっしょ 笑顔輝く 浅井北小

はじめに

本校では、地域と連携して豊かな心を育むために、地域と協働したホタルの飼育活動を中心に、家庭や地域社会の願いを取り込み、独自の活動を創造し展開している。地域に貢献したり地域の要望に応えたりする活動を通して、地域の自然、人々とのかかわりを深め、地域との絆づくりに努めている。

特に、ホタルの飼育やヤゴ救出をはじめとした自然・環境学習、福祉施設の訪問や奉仕活動を通しての人権学習、古墳探検や琴演奏・伝承遊び体験による地域の歴史や伝統に関する学習等により、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育（ESD）を進めている。

実践内容①

「自然環境を考える活動」

ねらい：生命や自然を尊重し、自然と共生できる環境づくりに主体的に関わろうとする態度を養う

ホタルの飼育活動は、「昔はこの地域にもホタルがいくらかでもいた。ホタルを子どもたちに見せたい」という地域の声を背景に、平成15年度から始まった。以前は濃尾平野にも生息していたという「ヘイケボタル」を、地域に住むホタルの飼育に詳しい方の協力を得ながら、飼育することとなった。主な活動は、ホタル委員会の児童が行う。幼虫が陸に上がれるようにする上陸セットの作製、えさやり、水かえ、ホタル日誌の記録、掲示物作り等で、ホタルの成長に合わせ、1年を通して活動を行っている。

毎年4月にホタル集会を行い、全校児童がホタルについて学ぶ。その後、地域に住むホタルの飼育に詳しい方に、



ホタルの放流の仕方などを教えていただき、学年ごとに校内のホタル池に幼虫を放流する。6月には、夜にホタル観賞会を開催し、地域の方や児童など、1000人近くの訪問を受けている。近年は、ホタルのえさとなるタニシがあまりとれなくなってきたのが問題である。

また、5月末にはトンボ教室を開催している。地域のビオトープ管理士を講師に招き、豊富な写真を使って、トンボの種類や生態、ヤゴの飼育法等について分かりやすく説明してもらっている。6月初めには3年生全員がプールに入り、ヤゴの救出を行っている。救出したヤゴは教室や児童の家庭で育て、トンボに羽化させて自然にかえしている。



ホタルの幼虫の放流会

成果

ホタルやヤゴの飼育では、生き物を育てることの難しさを体感し、「命の大切さ」についての意識が高まっている。さらに、ホタルの成長に合わせて環境を整備したいと考えるなど、自然を尊重し、自然と人が共生できる環境づくりに進んで取り組もうとする気持ちが高まってきている。

実践内容②

「人権を考える活動」

ねらい：互いに違いを認め、尊重し合い、差別や偏見のない地域づくりのための基礎的資質を養う

人権を尊重する心や他人を思いやる心、社会貢献の精神を育むために、1年を通して教員の研修を行い、道徳の時間の充実を図っている。また、児童と教師の共感的人間関係を築くために、教育相談活動やアンケート調査も随時行っている。12月の人権週間では、人権集会の開催や話し合い活動、人権に関するビデオ視聴の他にも、健全育成のポスターや習字、標語の募集を行い、意識の高揚を図っている。

また、全学年が地域にある老人福祉施設を訪問し、お

年寄りとのふれあいの場をもっている。お年寄りにダンスや歌、劇などを披露したり、肩たたきやお年寄りとゲームをしたりして交流を深めている。訪問の際には、お年寄りに喜んでもらおうと、工夫を凝らしたプレゼントを事前に用意している。



児童会の人権集会

成果

人権学習を通して、優しく、温かい言葉と行動で、友達とのコミュニケーションをとろうとする姿が多く見られるようになってきた。また、老人福祉施設訪問を通して、お年寄りに親近感をもつようになっている。

実践内容③

「歴史・文化・伝統を考える活動」

ねらい：地域の歴史や文化財、または伝統に触れたり体験したりして、それらを尊重する心を育む

地域の歴史を学ぶ機会としては、6年生が社会科の歴史で古墳について学習する前後に、古墳探検を行っている。校区内には、「浅井古墳群」として、歴史ある古墳が散在している。この恵まれた環境を活用し、事前に各自で調べ学習をし、探検後には撮影した写真なども入れて「古墳新聞」にまとめている。

また、地域の伝統文化に触れる機会として、地域の方々に講師に招き、様々な体験活動を行っている。6年生は琴の弾き方を教えていただき、学校公開日に、簡単な曲を

全校児童や保護者の前で披露している。4年生は名古屋友禅染に挑戦している。ランチオンマツ



地域のお年寄りとの伝承遊び

トに染料で色塗りをした後、加工し、世界に1つしかない作品を作る。1年生は、地域のお年寄りから、おはじきやめんこなどの昔の遊びを教えていただいている。

成果

古墳探検をはじめとする地域の歴史や文化財を学ぶことで、自分の地域に関心をもてるようになった。また、琴などの日本の伝統文化を体験することから、受け継がれてきた日本文化の素晴らしさを感じることができた。

おわりに

本校ではESDについて、全職員で研修を行い、学習と共通理解を深めている。そこで、これまでの教育課程を見直し、社会科や理科の授業・委員会活動・学校行事・総合的な学習の時間を中心に、「自然・環境学習」、「人権学習」、「歴史・文化・伝統に関する学習」を取り入れたESDカレンダーを作成している。ESDは持続可能な社会

づくりの担い手を育む教育であると捉え、自分たちが住む町の自然や歴史、人とのつながりについての学習を深め、今後も、その資質や能力の基礎的な部分を育ていこうと考えている。このような活動を継続していくことで、将来にわたって自分が住む地域やふる里の良さに気付き、誇りと愛着をもつ児童を育てていきたい。

長久手市立東小学校



創 立：1981年
 住 所：〒480-1102 長久手市前熊前山174
 連絡先：TEL 0561-62-4353 FAX 0561-63-7593
 学級数：10 児童数：219人
 H P：http://www.hm5.aitai.ne.jp/~nehigasi/



はばたけ長久手の未来に 心育む伝統芸能と福祉交流

はじめに

本校は、全校児童が219人という小規模学校である。長久手市の東部にあり、愛・地球博記念公園に近く、自然に恵まれた地域である。保護者も本校の卒業生という児童が多いため、地域とのつながりが深く本校の教育活動への理解も深い。故に、伝統芸能の継承活動や福祉交流への協力を多方面から受けられる環境にある。こういった

地域交流活動を通して、「つながり」「関わり」を尊重し、人間性を育み、思いやりの心を育てたい。

昨年度からは、ユネスコスクールとしてESDの理念をもとに、これまでの活動を見直し、さまざまな活動に取り組んでいる。

実践内容①

「あいち・なごや子ども会議でのポスターセッション」

ねらい：活動を通してESDで育みたい力を育成し、紹介活動を通してESDの普及促進を図る。

平成26年10月26日(日)名古屋市熱田区にある国際会議場内白鳥ホールで、ESDあいち・なごや子ども会議と本校の取り組みを発表するポスターセッションに参加した。本校は、これまで長年に渡って児童会活動やクラブ活動でさまざまな地域と連携した活動に取り組んできた。昨年度から、ユネスコスクールとしての二本柱でもある、「伝統芸能」と「福祉交流」には特に力を入れてきた。発表児童は、児童会役員活動や、伝統芸能・手話クラブの経験があり、準備・練習・当日の参加についても大変意欲的に活動することができた。

本校の取り組みの一つ目「伝統芸能」については、詩舞や和太鼓の他に、地域の方に講師になっていただき指導を受け始めた「ザイ踊り」がある。発表に関する内容の取

材は、講師に直接インタビューをしたり、授業を見学したりして自分たちでまとめた。二つ目の「福祉交流」は、市で推進する「認知症サポーター講座」、「介助犬を知ろう講座」（県内唯一の施設である介助犬訓練センターから講師派遣）、「手話クラブの活動」「福祉交流会」（老人ホーム訪問）についてまとめた。

発表の際は、情報伝達のバリアフリー化を考慮し、出来る限り手話も使うことにした。

翌年、平成27年10月10日(日)には、愛知県緑化フェアが校区にある愛・地球博記念公園で開催される中、「愛知県ユネスコスクール交流会」が行われた。今年度の活動も含めた内容に改良し、ポスターセッション部門に参加した。



緊張の中、頑張ったポスターセッション

成果

ESDの育みたい力を二点向上させることができた。一点目はポスター作成でデータや情報の分析能力の向上、二点目は質疑応答能力と、当日の実践でコミュニケーション能力の向上を図ることができた。さらに、手話を使った試みによって、我々の目指す「生きた福祉」を実践できた。

実践内容②

「児童会活動校外交流行事 『第5回福祉交流会』」

**ねらい：高齢者との交流を通して、共生の大切さに気づき、
自発的に活動する心を育む。**

平成23年度から校区内にある小規模特別養護老人ホームとの交流会を開催している。利用者の中には百歳を迎える方や認知症の方もいて、毎年秋に本校の児童が訪問するのを楽しみにしてくれている。交流会には、高学年の有志児童約20名が参加する。児童は、訪問までに、休み時間を活用して高齢者の方々に喜んでもらえる歌や、一緒に楽しめるゲームを選び練習する。話し掛ける声の大きさや目線の位置などを、二つのチームで、高齢者役と児童

役に分かれて練習する中から見付け出す。今年で5回目だったが、1回目に披露した地域に伝わる昔話を創作した大型紙芝居をリバイバル発表した。参加児童の中には、低学年の頃に高学年の人たちが読み聞かせてくれたことを思い出し、よりよい作品にしようと練習に励んだ。



待ちに待った福祉交流会

成果

児童は、どうしても楽しんでもらうことを中心に考え出向く。しかし、高齢者から労われ、喜ばれたことで自分たちも楽しませてもらったことに気付く。まさに、共生に気付ける体験ができる行事となった。

実践内容③

「長久手に伝わる『ざい踊り』」

**ねらい：地域の伝統芸能の素晴らしさを知り、
継承していきたいという思いを高める。**

長久手の東部にある一定の地域に、明治の初めごろから伝わる「ざい踊り」がある。夏祭りで5歳から12歳までの女の子が、棒の先に赤く染めた細長い房を束ねて付けた棒を持ち、先祖の供養のために踊る。児童の中には、地域の祭りに参加し、すでに踊りを習得している者もいる。本校は、平成26年度から継承活動を行っている方に指導していただくことができるようになった。地域のよいところ、残していきたい伝統文化を学習する3年生が、総合的な学習の時間に伝統芸能の一つとして学習している。

本来は、女子のものだが、男子も共に指導を受けている。



学習発表会で披露「ざい踊り」

歌は1番から13番まであり、少しずつ振り付けが異なる。それを10時間で習得し、自分たちでざいを作成・修繕し、11月の学習発表会で、保護者や地域の人たちの前で披露している。

成果

自分たちが暮らす地域の中の伝統を知り、真剣に練習に取り組むことができた。ざいの作成・体験・発表を通して、長久手のまちに残る伝統芸能を大切に、次世代へつなげていこうという気持ちが芽生えた。

おわりに

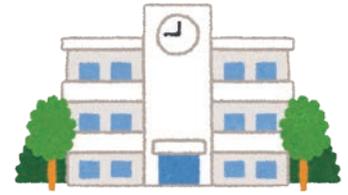
平成27年度にユネスコスクールとして認定され、これまでのクラブや児童会だけの活動という枠を外し、学校全体で情報を共有すると共に、教職員全体がこれまでの取り組みを見つめ直すことができるきっかけとなった。ESDカレンダーや登録校との交流活動も行うことができた。本校の二本柱は、福祉と伝統だが、ESD活動は多岐にわ

たる。一部の児童の活動だけでなく、4年生は環境教育、5年生は福祉教育、6年生は国際交流に取り組んでいる。次に見えてきた課題は、既存の教育活動をいかにESDと結び付けてより発展した指導を行うかということである。と同時に、ESDに対する教職員の理解をさらに深められるような研修の必要性を感じている。

豊橋市立大清水小学校



創 立：1958年
住 所：〒441-8132 豊橋市南大清水町字元町78番地
連絡先：TEL 0532-25-2418 FAX 0532-44-3065
学級数：15 児童数：392人
H P：http://www.ooshimizu-e.toyohashi.ed.jp



発見・探検・貢献「ふるさと大清水」

はじめに

大清水校区は、自治会、パトロール隊、しょうぶを守る会等の諸団体や福祉施設を中心に、本校の教育活動に非常に協力的な地域である。本校では、そうした地域の方々との連携を図りながら、自然・環境学習、福祉・人権学習、地域の歴史・伝統・産業に関する学習、食に関する学習（食育）を行ってきている。地域学習をさらに推進し

ていくために、総合的な学習の時間や生活科を中心に、身近な人・もの・ことから問題を発見し、校区を探検したり、地域の方にインタビューしたりしながら問題を解決していく学習を行っていく。そして、「ふるさと大清水」のためにすすんで貢献しようとする気持ちを高められるようにしたいと考え、本主題を設定した。

実践内容①

「われら大清水防災隊」

ねらい：危険箇所調べを通して、地震が起きた時に、どう行動したらよいか考えることができる。

防災について考えるきっかけとして、避難訓練のふり返りを交流し合った。「本当に起きても訓練したから大丈夫」という考えが多く出されるなか、「物が落ちてきたり、ガラスが飛んだりしたら怖い」「登下校の途中で地震が起きたらパニックになる」といった意見もあった。そこで、地震が起きた時に生き残るため、学校や通学路の危険箇所調べをしていくことになった。

校内危険箇所点検では、家庭科室や図書室にある棚の上の荷物、体育館のライトやバスケットゴールなどを危険箇所として挙げていた。また、ピアノの下にもぐるのは安全なのかという疑問も出てきた。

通学路を歩いた時には、校区自治会の方や保護者の協力を得て、一緒に危険箇所を見つけた。この点検では、



大きな木、ブロック塀、信号機などが危険ではないかと考える子が多かった。しかし、自分たちでは、何が危険なのか判断できないことから、防災危機管理課の中村さんを招いて話を聞くことにした。

まず、グループごとに調査した校内と通学路の危険箇所について意見を交流した。その後、子どもたちの話し合いについて中村さんよりアドバイスをいただいた。中村さんのお話から、「高いところに置いてあるものは、下ろさないといけない」「危険な場所を他の学年の子たちにも教えたい」「通学路をもう一度チェックしたい」といった感想が出された。そして、ポスターや校内放送で危険箇所を呼びかける活動へと動き出していった。



自治会の方と通学路危険箇所点検をする様子

成果

この学習を通して、子どもたちは、地震が起きた時、どう行動したらよいかを具体的にイメージできるようになった。また、自分だけが生き残ればよいのではなく、他の学年の子へも自分たちの調べたことを伝えなければならないという気持ちを持ち、行動することができた。

「おじいちゃん おばあちゃんとともに」

ねらい：お年寄りとの交流を通して、思いやりの心を持ち、他者のために自分の力を発揮できる。

本校では、毎年6年生が老人福祉施設である「元町グループホーム」の入所者の方々と交流をしている。

本年度も、7月の「七夕交流会」をきっかけに交流が始まった。本校の体育館に入所者と施設の方が来てくださり、願い事を短冊に書き、笹に結び付ける活動と一緒にいった。活動後には、多くの子が「真剣に話を聞いてくれてうれしかった」「もっと交流したい」といった感想を書いており、交流を深めていきたいという気持ちが高まった。そこで、今度は自分たちが「元町グループホーム」に出かけて行くことにした。

まず、交流会に向け、「どんな交流会にしたらよいか」について話し合った。「一緒に料理したい」「ヨーヨーや魚釣りはどうか」などの意見が出された。しかし、「食べられないものもあるのではないかな」や「長時間立っている遊びは難しいのではないかな」といった意見から、お年寄りのことを知らないと交流会が成功しないのではと考えた。そして、お年寄りの体や好きなことについて、本で調べたりインタビューしたりすることにした。

調べ学習をする中で、お年寄りになると耳が聞こえにくくなること、体の動きがゆっくりになることなどがわかってきた。また、年を取ると「^{えんげ}嚥下障害」があるので、食べ物には注意しなければならないことも知った。調べたことをもとに、第1回の交流会の計画を立てた。子どもたちは、



お年寄りの話を真剣に聞く子どもたち

一緒に楽しめるように、けがをさせないようにと配慮した遊びを考え、準備することができた。



短冊に願いを込めた七夕交流会

第1回の交流会は、多くの子が笑顔で話しかけたり、車いすをすすんで押し回したりと積極的に関わることができていた。交流会の感想でも、「笑顔で反応してくれてうれしかった」「思った以上に遊びが上手でびっくり」といった意見が多く出された。しかし、「上手に接することができなかった」「全然話せなかった」など困ったという意見もあった。もっと交流したいという気持ちがある反面、不安をもつ児童も少なからずいた。そこで、不安や困っていることを解決するために、高齢者疑似体験や介護士さんへ質問するなど、新しい活動へと発展していった。

解決方法の話し合いでは、認知症の方との接し方で困っている子が多かった。それに対し、「何度も聞かれたら、何度も言えばいい」「優しい言葉かけをすればいい」などのアドバイスが出され、すすんで関わっていきこうとする気持ちを高めることができた。そして、第2回交流会では、認知症が進み会話にならない方にも、何度も話しかける子どもたちの姿が見られた。

成果

お年寄りは、子どもたちとの交流を心待ちにしていた。そうしたお年寄りと関わることで、子どもたちは人から必要とされる有用感を高めることができた。そして、「もっと喜んでほしい」「交流したい」という思いをもち、思いやりや親切にすることの大切さにも気づくことができた。

おわりに

5年生の防災学習や6年生の福祉交流では、身近な地域の中から課題を発見し、多くの地域の方々と関わりながらその課題を解決していくことができた。福祉交流では、課題を解決するだけでなく、人との関わり方についても考えを深めることができた。子どもたちの中には、授業以外

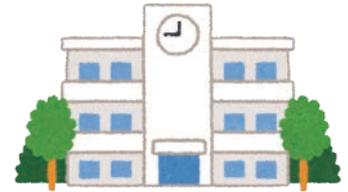
の時間にもグループホームに行き、お年寄りとの交流を続けている子もいる。

今後は、課題を解決するだけにとどまらず、自分たちがわかったことや気づいたことを、地域へ発信できるような実践を進めていきたいと考えている。

安城市立里町小学校



創 立：1979年
住 所：〒446-0001 安城市里町足取1-5
連絡先：TEL 0566-98-5900 FAX 0566-98-5901
学級数：22 児童数：602人
H P：http://www.anjo.ed.jp/~satomachi/



地域に根ざし、未来を見すえる子どもたちの育成

はじめに

本校がある安城市里町は、田園風景が広がり、米や梨づくりなどの農業が盛んである。また、大工場もあり新興住宅も多い。地域の歴史は古く、およそ1100年前に創設された不乗森神社をはじめ、多くの名所旧跡が見られる。しかし、子どもたちは、地域の歴史のみならず、現在の様子についても目が向いていない。そのため、地域のよさや

課題を吟味することなく、漫然と過ごしている感が強い。そこで、多くの事実や思いにふれ、地域の一員であることの喜びを感じながら、未来を見すえ、地域を担っていかうとする姿を願い、主題を「地域に根ざし、未来を見すえる子どもの育成—地域の人たちの思いを深く考える、体験と話し合い活動の実践を通して—」とした。

実践内容①

「地域を見直し、将来を見つめよう」

ねらい：里町の人・もの・ことと対話し、
次世代の担い手としての意識を高める。(総合的な学習)



子どもたちが、地域や身近な人とかかわる中で、課題を見つけ、主体的に追究活動を行い、解決していかうとする態度を養う。そのために、地域の教育素材(人・もの・こと)を積極的に活用しながら以下のように取り組んだ。

3年生は、梨について追究する。梨は地域の特産品であり、保護者も生産に携わっている。そこで、年間を通して何度も見学やインタビューをして、生産者の苦労や喜び、工夫などを理解する。

4年生は、「水の環境探検隊」として、明治用水を開削した人々の思いや、それによって地域が発展したことを理解し、暮らしを支える水について考える。また、土地の高

低の調査から水の流れを実感する。

5年生は、「お米ツアーへ、ようこそ」と題して、学区の農家の協力を得て稲作体験を行う。そして、日本の食について学び、自分の食生活を考え直したり、実践したりする。

6年生は、「私たちの里、そして未来」として、地域の歴史や人々について学び、先人の思いにふれる中で、地域の未来について考える学習を進める。

これらの地域から学んできた学習の成果を「里小まつり」で発表する。各学級ごとに、他学年の子どもたちや保護者に問いかけ、考えをさらに深める機会とする。



3年生「梨畑の見学」

成果

6年生のふり返りでは、自分も地域に貢献できていることを実感したり、「里町の未来や今を考えて動く人が里町を支えている人だと思う」という意見が出されたりした。そして、多くの子どもたちがこれからも地域の行事に積極的に参加・協力していかうと考えるようになった。

「都築弥厚 生誕250年記念ウォークラリー」

ねらい：都築弥厚の夢と志があって、
郷土が潤っていることを改めて実感する。(学校行事)

日時 10月4日(日) 午前中

場所 安城市立里町小学校周辺

対象 児童602名、保護者300名

内容

①弥厚の計画が基となった明治用水の価値

明治用水が作られる以前には、この地域には八幡池、菖蒲池、鷲蔵池が水がめとしてあったが、水についての問題が絶えなかった。しかし、都築弥厚の夢と志を受け継いだ人々によって明治用水が作られ問題が解決された。そして、現在のように豊かな田園が広がるようになった。

②方法

- ・ 明治用水に関連する4コースの中から、1つのコースを事前に通学班で選択する。
- ・ 当日はガイドやマップを見ながら、通学班ごとにコースを探訪する。希望する保護者も参加できる。

③準備

- ・ 教員によるコース選定チームが資料を集めたり、現地を訪れたりして、原案を提示する。そして、正式決定後、教員によるマップ作成チームが作業を開始する。
- ・ 安全点検や現地での説明の仕方などの確認のために、教員が下見を繰り返す。
- ・ PTAの協力も要請する。ポイントでの立ち番やゴール地点での飲み物の提供を依頼する。



ウォークラリーAコース「花の滝跡」

④コースの実際

A 花の滝コース(約4km)

明治用水西井筋を通して、古くから和歌の中に織り込まれた「花の滝」へ進む。そして、不乗森神社へ至る。

B 八幡池コース(約3km)

八幡池が、何百年もの間、村を支えてきた。今はもうないが、巨大な池跡は残っている。その池跡を周遊する。

C 一斗山コース(約4km)

明治用水の水がどこで使われ、使われた後はどこへ流れていくのかたどる。

D 三連水車コース(約6km)

明治用水本流が、西井筋と枝分かれするところにある三連水車までを行き来する。行きは西井筋、帰りは本流を通る。



ウォークラリーDコース「三連水車」

成果

「私は、4年生の時に学習した明治用水のことを思い出しました。今回歩いて、知らなかったことも分かりました。班のみんなと楽しく里町のことを学ぶことができ、よかったです。」と、6年生の子どもが記述している。過去から現在を見つめる姿を期待したい。

おわりに

地域の教育素材を積極的に活用しながら単元を構成したり、地域を巡るウォークラリーを行ったりしたことで、地域に親しみ、関心をもつことができた。また、実際に目で見て、地域の人から聞くことを通して、実感を伴って学習内容を理解し、深めることができた。6年生では、地域に貢献している自分を自覚し、地域の行事に積極的

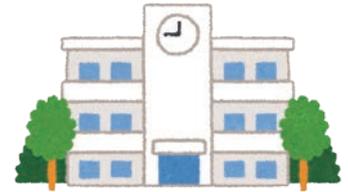
に参加・協力していこうという気持ちをもたせることができた。

今後も、地域に根ざした学習を進めることで、自分の地域を実感を伴ってとらえてほしい。そして、地域に愛着をもち、地域の未来を見すえ、地域をつくり上げていってほしいと願う。

名古屋市立内山小学校



創 立：1911年
住 所：〒464-0075 名古屋市千種区内山一丁目4番15号
連絡先：TEL 052-741-1257 FAX 052-732-2364
学級数：8 児童数：121人
H P：http://www.uchiyama-e.nagoya-c.ed.jp



自ら学ぶ力を育むためのESD

はじめに

児童は、たくさんの方が行き交う駅、オフィスビル、古い家、商店街など多様な住環境で過ごしている。しかし、児童数は少ないため、コミュニケーションの幅が広げにくい。そこで、より広く多くの人との関わりをもつことが本校の児童の未来に生きる力につながると考え、「地域と共に未来の内山小学区を考える」を防災学習や環境学習のめ

あてとして取り組んできた。昨年度までは、地域とともに防災を学び、それを広める実践を行ってきた。本年度は、防災学習で学んだことを外部の方に意見を求めながら、それを検討し、さらに深い考えを構築していく。また、自らの目標を考え、学びの幅を広げることができるようにしていくことをねらいとした。

実践内容①

「自分の命は自分で守りたい。今私たちができること」



ねらい：防災の観点で地域を調べ、学区に暮らす人の意識を知り、今できることを考える

大きな地震が起これば、学区ではビルの倒壊、駅にあふれかえる人々の混乱等が予想される。そこで、自分の命は自分で守れる児童を育むために、〈知る→考える→行動する〉の学習活動の流れで以下の実践を行った。

知る 教師が全員のそばにいない休み時間や清掃中に行う避難訓練でのアンケート調査の検証から、低学年がうまく避難行動ができていなかった点を知った。また、家庭で避難訓練を行い、避難経路にあるビルの安全性を調べ、危険な場所と安全な場所を知った。

考える たくさんの方の命を守るために調べたことを、低学年や学区の人に伝える方法を話し合い、どこがどのように危険な箇所か分かる校内の防災マップや、避難経路まで歩いて分かったことを知らせる学区の防災マップを作成した。

作成途中で何度も話し合い、危険がひと目で分かる写真を貼ったり、ビルの高さが分かる立体地図にしたりした。

行動する 低学年のクラスに出向いて、防災マップを見せながら、五・七・五の俳句のリズムのカルタにのせて説明したり、クイズを出したりして、学んだことを広める活動を行った。また、学区の防災マップの製作中に見えてきた避難経路の危険性を家族に伝え、家族の意見を聞いて、学級で共有した。さらに、危険性を回避するための方策を話し合い、副市長や保護者に向けて「未来の安全な学区のために」という発表をした。また、県が主催するESDの発表会で、今までの学習活動を報告し、他校と交流も行った。これら校外の人の意見を参考に、未来の学区を思い、今できることを考えるようになった。



低学年にマップで学校の危険箇所を伝える活動

成果

児童が目的意識をもって活動する中で、外部の方が自分たちの取り組みに参加したり、進んで話を聞いてくれたりすることで、伝えることの手応えを感じていた。そこから、学び続けたいと意欲を高め、自分たちが今できることで未来の学区に寄与し続けていきたいと考えるようになった。

「未来の地球は私たちが守るんだ」

ねらい：蝶との出会いをきっかけとして、地球規模で環境を考え、今できることを考える

1. 気付きを育む蝶の観察

昨今、身近に飛来しているツマグロヒョウモンを幼虫から育て、観察しながら成虫まで飼育した。飼育の中で、気付いた児童の疑問を中心に実験を行い、食草や温度の影響、雌雄の発生時期の違いなどを突き止めることができた。また、児童自らが、学区の調査を行い、同じ食草があっても生息する数に大きな違いがあることまで突き止めた。さらに、ツマグロヒョウモンを家庭でも愛着をもちながら飼育することで、保護者にもツマグロヒョウモンが認知されることになった。そして、家族との話題の中で、保護者の世代には見られなかった蝶だと知ることになった。なぜ、昨今ツマグロヒョウモンが身近に見られる様になったのかについて児童が疑問をもち、その理由を探究していった。観察していく中で、温かい時に活発に動き、より多くの蝶の飛来が見られることや、保護者への聞き取りから、昨今パンジーやビオラなどが身近にたくさん植えられるようになったことを知った。それらの調査と、50年前には名古屋にいなかった事実とを勘案させて考えていった。名古屋の温暖化について気付いていった。

2. 気付きから身近な環境を考える

ツマグロヒョウモンだけでなく、クマゼミなど多くの昆虫が、保護者世代に見られた昆虫と異なってきたことを聞き取り調査し、身近な環境への興味・関心を高めた。さらに、地球の様々なところで災害をもたらしている異常気象現象や、昔より地球が暖かくなっていて、極地の氷が溶ける現象や動物たちの異常な行動が多くなっていることを知った。身近な環境と地球規模の現象とを結び付けて考え、未来の自分たちの環境への不安から、自分たちが今できることを模索していった。

3. 未来の地球のために、今できること

市民が守っている東山の森を観察に行き、自然の心地よさを味わった。そこで、自然を守る大切さと年月を掛けて行わなければならない事実を知った。また、そこで、拾ってきたドングリを持ち帰り、その芽を育てて、自然があふれる未来の学区を想像しながら植える活動を行った。さらに、家庭と協力して今一人一人が行うことができる温暖化防止策を考え、一つの行いをしたら1ポトリ^{*}と名付けて、その成果が見られるようにポトリカードを廊下に貼っていった。



成果

温暖化対策として、ゴミを出さない、無駄な電気をつけないなどを児童自身が行うだけでなく、車を使わないことを提案したり、家庭のスイッチをこまめに切ったり、出掛ける時はコンセントを抜いたりと家族を巻き込んで行動を起こすまでになった。児童の実践を快く家族も応援していった。

おわりに

高いビルが立ち並び、地域住民以外の多くの人が働く学区では、子どもが主となって、防災や自然環境について学んだことを地域に働きかけることは難しい。しかし、身近な環境に目を向け、問題意識と未来志向を育てていくことで、児童が学区の一市民に育っていく過程で、未来に向かって少しでも実現していこうという建設的な行動がで

きると考える。防災や地球温暖化問題に真剣に取り組み、周囲の大人に訴えかけることで、大人の意識が変わっていったことを児童は実感することができた。2つの実践では、今、自分たちにできることを見つけて行動していく大切さと、小さな声を地域とともに学び続けることで、大きな声に広めていく重要性を学ぶことができた。

豊橋市立五並中学校



創 立：1947年
 住 所：〒441-3113 豊橋市細谷町字北芋ヶ谷30番地の44
 連絡先：TEL 0532-21-1149 FAX 0532-44-5011
 学級数：7 生徒数：179人
 H P：http://www.inami-j.toyohashi.ed.jp



地域の環境を学ぶ表浜プロジェクト

はじめに

本校は、豊橋市の渥美半島の付け根に位置し、東は静岡県境に接し、黒潮が運ぶ穏やかな気候と豊川用水の便に恵まれた農業地帯である。「小島梨」は、全国的にも有名な特産物となっている。「小さな学校の大きな夢」を合言葉に、昭和60年から始めた連風揚げは、平成9年に世界記録を果たした。翌年には自己記録を更新し(15,585枚)

ギネスブックに登録された。平成21年度からは、連風揚げの舞台であった表浜や五並校区の環境を学ぶ活動「表浜プロジェクト」をスタートさせた。表浜の植物やアカウミガメについて学んだり、五並校区の環境対策を調べたりする活動を通して、環境への意識を高め、郷土を愛する活動に取り組んでいる。

実践内容①

「1年生の表浜プロジェクト」

ねらい：五並校区の環境について、いろいろな視点から調べることで、関心をもつ。



毎年4月に新入生を歓迎する行事「表浜フェスティバル」が、表浜海岸で行われている。表浜フェスティバルでは、たてわり班で弁当を食べたり、砂の造形を行ったりして交流を深めることができた。また、その際に海岸清掃を地域の方と行ったり、津波対策の避難訓練を行ったりした。これらの活動により、自分たちの校区にある表浜海岸の魅力が改めて確認することができた。

5月に行われた野外教育活動では浜松市の中田島砂丘に出かけ、海岸を守る活動をしている「海岸浸食災害から住民を守る会」の方から、海岸を守るための取り組みの話

を聞きながら散策した。また、NPO法人表浜ネットワークの方をお招きして、表浜海岸やアカウミガメの話聞いた。表浜海岸の現状や問題を知り、さらに表浜海岸への関心を高めた。

その後、五並校区の環境について、調べてみたいことを考えたところ、①ごみ ②空気や温度調査 ③水 ④発電や家庭でのエコ活動が出された。そこで、グループに分かれて夏休みなどを利用して調査活動を行った。その結果、五並校区の空気や水は、他の地域に比べてきれいであることなどがわかった。しかし、表浜海岸に捨てられるごみがたくさんあることや、海岸に漂着するごみの中には外国から流れてきたものもあることなど、問題があることもわかった。



野外教育活動における中田島砂丘散策

成果

1年生では、これらの活動を通して自分たちが住んでいる五並校区や表浜海岸の環境のよいところや問題点を知ること、環境に対する関心を高めることができた。また、問題点を少しでも解決していきたいという思いをもつこともできた。

実践内容②

「2年生の表浜プロジェクト」

ねらい：1年生で学んだことをもとに、五並校区で行われている環境対策について理解を深める。

2年生では、夏休みや名古屋分散学習を利用して、①ごみ ②表浜 ③風力発電 ④太陽光発電という五並校区の環境に関わりのある4つについて、調べ学習を行った。名古屋分散学習では、自分たちでテーマに沿った内容の話が聞ける企業や施設を訪問して学習を進めた。消防服やシートベルトなどの廃材を加工した商品を販売するアップサイクルの取り組みや、農地に太陽光発電システムを設置して、その設備の下で農業を行うソーラーシェアリングという取り組みなどを知ることができた。また、夏休みには五並校区に設置されていて羽根が壊れている風力発電施設を設置・管理している会社を訪問して、壊れた羽根をどうしていくのか、発電した電気の利用法などを学んだ。施設の中も見せていただくこともできた。それぞれのグループでわかったことをまとめ、文化祭で発表した。



風力発電施設を設置した企業を訪問

設を設置・管理している会社を訪問して、壊れた羽根をどうしていくのか、発電した電気の利用法などを学んだ。施設の中も見せていただくこともできた。それぞれのグループでわかったことをまとめ、文化祭で発表した。

成果

これらの活動を通して、企業や行政、ボランティア団体などが、さまざまな形で環境に対する取り組みを行っていることを知ることができた。自分たちが知らなかった新たな活動や取り組みについて学習することができた。

実践内容③

「3年生の表浜プロジェクト」

ねらい：将来の五並校区の環境について考えたり、調べたりして理解を深める。

3年生では、修学旅行の班別分散学習を利用して、①農業 ②表浜 ③環境保全 ④エネルギーという五並校区の環境に関わりのある4つについて、企業や施設を訪問した。農業について話を聞いた班では、これから農家の減少は進み、日本の問題として考えなければいけないことや、農産物のブランド化におけるメリットなどについて学ぶことができた。エネルギーについての話を聞いた班では、波力発電に着目し、この技術の魅力や将来性について学んだ。表浜についての話を聞いた班では、海岸の清掃などを中心



文化祭でまとめた新聞を展示

に行っているボランティア団体を訪問し、活動の様子を学ぶことができた。それぞれのグループでわかったことを新聞にまとめたり、文化祭で発表したりして多くの人に伝えることができた。また、3年間の活動を一人一人がレポートにまとめることができた。

成果

修学旅行を利用したことで、なかなか訪問することができない場所へ行くことができたり、貴重な話を聞いたりすることができた。2年生までに追究してきたことを、さらに深めることもできた。

おわりに

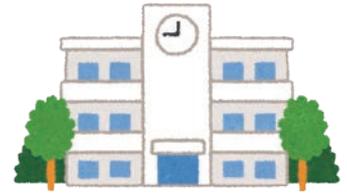
表浜プロジェクトを3年間継続して活動したことで、自分たちが住んでいる五並校区の環境について、よいところや問題点などの現状をたくさん知り、理解を深めることができた。また、自分たちが住んでいる五並校区への愛着を高めることにもつながった。さまざまな行事と表浜プロ

ジェクトをタイアップさせたことは、活動時間の確保や活動範囲を広げることにつながり、より効果的な活動となった。これからも、より充実した活動になるように工夫をしながら進めていき、自分たちが住んでいる五並校区を知り、愛着や誇りがもてるようにしていきたい。

岡崎市立新香山中学校



創 立：1984年
住 所：〒444-2141 岡崎市桑原町字大沢20番地86
連絡先：TEL 0564-45-2026 FAX 0564-45-7803
学級数：13 生徒数：381人
H P：http://www.oklab.ed.jp/weblog/sinka/



環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成

はじめに

「ぼくは、多くの生物たちが絶滅しているのは知っている。しかし、友達の話聞いて、改めてその危なさを知ることができた。しかも、その原因のほとんどが人間のしわざだった。これからは、できるだけ多くの生物が絶滅しないように気を付けて生きていきたい」この生徒Aのように、これまでの環境学習の学びを通して、「未来を意識した

考え」を導き出すことができるようになってきた。

生徒は、小学校で岡崎市教育委員会が作成した環境学習プログラムに取り組み、学びを深めている。今のこっぴど考えられない自己中心的な考え方から未来志向の生き方へ考え方が変わると、きっと新しい価値観が見い出せるであろうと実践した歩みである。

実践内容①

「外来生物をどうすべきか、希少生物を保護すべきか考えよう。」



ねらい：岡崎市環境学習プログラムを基盤とし、そこに新香山の地域教材を取り入れた実践。

導入は、身近なタンポポの観察から始めた。中学校に入学してきて、理科の最初の単元「植物の生活と種類」で興味をもったタンポポ。生徒たちが観察していくと、すぐにセイヨウタンポポ（外来種）とカントウタンポポ（在来種）の存在に気づいた。2種類のタンポポの相違点を調べ、2種類のタンポポの生えているところを調査する学習を行った。そこでの学びを通して、校内での2種類のタンポポの様子は学区ではどうなのかと疑問をもち、地域に広げて考えをもつようになった。直後に、学年で「第1回新香山っ子学区調査～タンポポ編～」として学区のタンポポを中心とした外来種と在来種の調査を行い、バイオリージョンマップにまとめ、報告会を行った。報告会の中では、外来種と在来種の数が高まり、生徒Aの「このまま

だと生き物の数が変わるだろう」という意見をきっかけに討論の場を設定した。実際に学区のササユリなどの絶滅危惧種について調べ学習をしたこと、友達の意見を聞いて「その場」で書いた考えを「その場」で教師が称賛することで、自分の意見を自信をもって発表したり、友達の意見に賛成や反対を言えたりする場面が見られた。生徒Aがぼつりつつぶやいた「生き物の数が変わっていると思います」から討論を進めたことで、議論が深まり、生徒Aも納得して以下のように感想を書いていた。「このままいけば、絶滅危惧種の動物は、減少してしまうので、一人一人が動物を守れるような行動をすれば、絶滅危惧種の動物を守れると思います。ぼくは、動物の部位を使っているものを買わないようにします」（資料1 生徒Aの授業後の感想より）



協力して学区の植物を調査する生徒の様子

成果

生徒の感想に「もっと外来種や在来種のことを調べたい」があった。これを満足させるために、①体験を重視し、自分の考えが言えること②学区や少年自然の家に生息するササユリを活用すること③外来種について詳しく学べる場を探すことの3点に留意して、単元構想を考え直した。

実践内容②

『『関わり合い』を鍛えるGWT&MDT』

ねらい：GWTで培った友達の意見に耳を傾けることに、自分の意見を重ねられることである。

4月当初、自己肯定感を実感する経験が少なく、自信がないのは、1年1組にもあった。これを鍛えるために、全校体制でGWT（グループワークトレーニング）を月2回のペースで行った。最初から楽しく活動をしている生徒が多く、「先生！また、GWTやろう」と全員が意欲的に参加できた。さらに、学級経営にも相手を思いやる発言が出るなどよい効果が表れてきた。さらに、朝の時間にMDT（ミニディスカッションタイム）を12分間、1学期は、週2回、2学期からは週4回行ってきた。テーマは、と

にかく簡単で身近なものにした。意欲をかき立てられるようにできるだけ自分事になるようにした。最初は、教師が司会をしながら時系列に板書していたものを系統的に書くことを意識して実践した。友達の発言に「〇〇さんの意見に反対で」や「〇〇さんの意見はよく分かるんだけど」と文頭に言葉を添えて、意見を言える生徒が増えた。



小グループで本気で討論する生徒の様子

成果

実践を積み重ねた結果、相互指名にして司会の役割を減らし、板書も生徒に書かせ、自分たちでどんどん討論できるようにした。すると、議題が自分事になり、本気の討論が12分間でもできるようになってきた。

実践内容③

『本気で探究『徹底討論！獣害問題』』

ねらい：「害獣を捕まえたら、駆除するか？保護するか？」をテーマに、生徒の思考の変遷に迫る。

さらに、学区のことを調べたくなった生徒は、夏休みに3度目の学区調査を行い、9月にバイオリージョンマップを完成させて、報告会をした。学年で意見交流を図り、学区の問題点を浮き彫りにした。そこで出てきたのが獣害問題である。道徳教材「トキのキンちゃん」で命を考え、道徳「ファロパさんの決断」で、世界規模で地球温暖化が起こる中での人の気持ちの葛藤を自分事と捉えてきた生徒たち。①聞き取り調査や調べ学習を終えたところ、駆除する派13人、保護する派16人。②日浅さん（ゲストティーチャー）

の話の後では、駆除する派21人、保護する派8人。③イノシシが止め刺しされる映像の視聴後では、駆除する派14人、保護する派15人。以上の結果となった。その時々には、必ず理由も記入させてきたので、意見が変わらない生徒も意見が変わった生徒も、討論時の準備材料にもなり、討論会に意欲的に入ることができた。



本物に触れ、獣害問題を自分事として捉えようとする生徒の様子

成果

害獣（イノシシ）を殺す映像を見てからは、駆除・保護のどちらかに偏るのではなく、お互いに生徒たちで折り合いのつけた考えが出てきたのがここまでの話し合いを重ねてきた成果だと感じた。

おわりに

新香山中だからできる地域教材として、在来種であるササユリが生息していることを生かしていけるよう単元構想を練り直した。生徒の問いが連続してもてることに気を付けた。これにより、岡崎市環境学習プログラムにあるCATCH・ACTION・REFLECTIONの探究のスパイラルが構築され、本気の追究につながった。

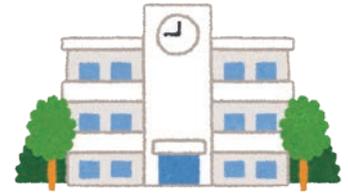
今後の未来志向の生き方を学習する課題として、次の3つをあげたい。

- ①これからも、日々の暮らしと関わる地域教材を加える。
- ②丁寧に聞く姿勢を育てる。→聞き手が語り手を育てる。
- ③変化していく未来に対して、対応できる力を身に付けさせる方法を確立する。

愛知教育大学附属岡崎中学校



創 立：1947年
住 所：〒444-0864 岡崎市明大寺町栗林1
連絡先：TEL 0564-51-3637 FAX 0564-54-4518
学級数：12 生徒数：478人
H P：http://www.oj.aichi-edu.ac.jp/



生き方の探究

はじめに

子どもは夢にあふれている。子どもが夢を実現するためには、そのために必要な資質や能力を身につけることが大切である。夢を実現するために必要な資質とは、よりよい社会を実現したいと強く夢に描き、夢の実現のため行動を始められること。社会情勢や多くの人々の思いや考えを取り入れ、グローバルに考えられる広い視野をもつ

ことである。そのうえで、生活の中から問題を見つけ出し、粘り強く問題解決に向けて取り組む能力が必要である。私たちは、全ての教科教育、総合的な学習、道徳、行事等の特別活動において、生活教育を基盤とした問題解決的学習過程により、持続可能な社会を旨とし、生き方を探究し続ける子どもを育成する。

実践内容①

「自然体験活動『然～然るべき姿を取り戻すために～』」



ねらい：森林と共生する必要性を考え、森林との共生を実現することができるようにする。

子どもは、日本の森林がほとんど人工林であり、整備が十分されていないため、森林が危機に瀕しているという事実を知った。さらに、富士山のふもとの天然林である樹海も、不法投棄などにより危機的な状況であるという事実を知った。子どもは、何度も学年討論会を開催し、「然 然るべき姿を取り戻すために」というテーマを決定し、1年生秋から、2年生の自然体験活動に向けて準備を始めた。子どもは、自然を取り戻し、守るために何ができるのかを話し合った。さまざまな活動の中から、人工林を守るための間伐と、天然林を守るための清掃活動を行いたいと考えた。そして、そのために天然林がある富士のふもとで活動を行うことに決めた。子どもは、自然体験活動本番に向けて、追究を深めることにした。まず、森林や

自然に詳しい方を学校にお招きし、話を伺った。さらに、プレ活動として地元の竹林で間伐の練習をした。こうして、自然体験に向け思いを高め、技術を身につけた。自然体験活動当日、追究により間伐の必要性を学んでいた子どもは、自分たちの手で自然を守りたいという強い気持ちをもって間伐に取り組んだ。子どもは、時間いっぱい仲間と協力しながら間伐を続けた。清掃活動では、土砂の中から次々ごみが出てきた。土砂の中でごみは地層となっており、絶えることなくごみが出続けた。深いところからは、40年以上前の瓶や缶も出てきた。その現状を目の当たりにし、身勝手な業者や大人たちの行動に憤りを感じた。この活動で、760kgを超えるごみを回収した。自然体験活動の最終日、全員で振り返りとなる討論会を行った。



富士の樹海で清掃活動を行う子ども

成果

自然体験活動を終え、森が命を育み守っていることを知った子どもは、改めて森と共生していくことの必要性を実感した。そして、自分たちの手で森を守りたいという思いを高めた。中には、総合的な学習の個人テーマを森林保全に切り替え、さらに追究を深めていく姿も見られた。

実践内容②

「植物工場が動き出す（社会科）」

ねらい：植物工場がもたらす日本の新たな農業に迫り、未来に生きる自分のかかわり方を考える。

植物工場に関する映像を見た後、工場で生産されたトマトを手にした子どもは、植物工場について詳しく知りたいと考え追究を始めた。植物工場が普及すれば、国内の食料自給率や輸出量を大幅に向上できるうえ、安心・安全な無農薬野菜を作れることがわかった。しかし、機械の故障などのリスクやコスト高など問題も多くあることがわかった。子どもは、植物工場の発展が日本の農業にどのような影響を及ぼし、日本の食料がどうなろうとしているのかを知りたいと考え、追究を深めた。そして、企業や官

公庁への取材により、植物工場と露地栽培の共存が大

切であるという考えをもった。意見交流を進める中で、子どもは、消費者が現代の農業の危機を知り、動き出すことで、未来の農業を守れると捉え始めた。こうして、食料生産を持続して行うことができる未来の農業のあり方を考えなければならないと考え始めた。



野菜工場へ取材に出かけた子ども

成果

消費者である自分たちが、よりよい日本の農業を支えるために、食料を確保することができる未来の農業の姿を探し求め、自分にできることをよく考えて行動しなければならないと考え始めた。

実践内容③

「日本の国際支援 ～発展途上国のない社会～（総合）」

ねらい：夢に向かい、授業、教室という枠組みを越えて、とことん自分の追究を行う。

生徒Aは、小学校2年生のとき、「トットちゃんとトットちゃんたち」という本からユニセフ親善大使がアフリカを訪問したときの様子を知り、ショックを受けた。発展途上国と先進国の差がない社会、そして発展途上国がなくなことを願い、そのために、日本や自分ができることは何かを知りたいと追究を始めた。1年生では、アフリカのHIV感染率を知り、心を痛めた。また、小規模な支援団体では、活動資金の調達に苦勞し、支援したくてもできない現状も

知った。生徒Aは、他の国際支援団体の

活動についても追究を進め、見返りを求めず活動するスタッフの信念やプライドに感銘を受けた。更に追究を深めた生徒Aは、修学旅行で、国連UNHCR協会を訪問した。協会の方は、これまでの追究の深さに感心し、一人一人のボランティアの心を育てる大切さを語ってくださった。



修学旅行の訪問先で思いを語る子ども

成果

3年間を通して追究する中で、自分の夢に対する覚悟があるのかどうかを考え直した。そして、見返りを求めない活動をするスタッフのような、強い信念やプライドをもたなければならないという思いが芽生えた。

おわりに

子どもは、夢にあふれている。子どもには、夢に向かって突き進む強い意志と、将来にわたって生きてはたらく確かな力を育ててほしい。持続可能な社会を実現するために、自らを鍛え、磨き続ける人になってほしい。現代社会は、情報化、国際化、高齢化などが進み、急速に変化している。社会の変化とともに、さまざまな問題も生じている。しかし、

強い意思と確かな力を備えていれば、希望ある未来を想定し、問題の解決に向かって突き進むことができる。自分だけでは解決できない問題であっても、仲間と関わることで解決できる。私たちは、持続可能な社会の実現に向けて、夢をもち続け、行動できる子どもを育みたい。そして、未来を担う子どもが、よりよい社会をつくりあげてくれることを期待している。

名古屋国際中学校・高等学校



創 立：2003年
 住 所：〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町1-16
 連絡先：TEL 052-858-2200 FAX 052-853-5155
 学級数：22 生徒数：767人
 H P：http://www.nihs.ed.jp/



SOCIAL ACTION!で持続可能な開発を担う人材育成

はじめに

私たち名古屋国際中学校・高等学校では、グローバルな社会で活躍するのに必要な力を身に付けるために、「多文化共生と減災」「経済活動と貧困」「社会生活と循環」の3つの分野を設定して様々な活動を行っています。3つの分野での活動から社会問題を探し、その解決を目指す



『SOCIAL ACTION!』を実践しています。また、企業やNPO団体など外部組織と連携・協力しながら、社会問題に対して積極的にアプローチしています。

学習活動では、アクティブラーニングを積極的に活用し、基礎学習→グループワーク→フィールドワーク→外部連携を通して、校内でのACTION!やSOCIAL ACTION!に繋がります。

実践内容①

「多文化共生と減災」



ねらい：あらゆる災害に対して減災に導ける発想力や実行力を身につけます。

全校で総合的な学習の時間に、「学校帰りに、コンビニ内でマグニチュード7の南海トラフ巨大地震に遭遇!あなたは何をしますか?」というタイトルのワークシートを用いた基礎学習を行い、被災した際の判断の重要性や難しさについて考えました。次に、校内でのACTION!として、9月1日に県内一斉に実施するあいちシェイクアウト訓練と合わせて防災訓練を行いました。シェイクアウト訓練では、災害に備え [まず低く] → [頭を守り] → [動かない]の一連の動作を行います。本校ではグローバルな視点を重視し、3つの動作を英語表記で [DROP!] → [COVER!] → [HOLD ON!] にしました。夏休みには、生徒達は自宅周辺の避難場所や避難所を調べ、自宅までのルート

減災マップにまとめました。また、そのルートにある危険個所についても調べ、想定される災害を予測しレポートを作成しました。このフィールドワークを通して、災害時に学校や自宅にいた場合に、「どこに」・「どのように」避難しなければならないのかについて学習しました。また、減災に関心がある生徒や運動部を中心に救命救急の講習を受けています。救命処置の正しい知識を習得するだけでなく、外国人の方でも救命できるよう、救命時に英語でコミュニケーションが取れる国際生を目指しています。2015年4月に発生したネパール大地震と9月の関東東北豪雨の支援のための募金活動を校門前や最寄り駅で行い、『SOCIAL ACTION!』を実践しました。



ネパール大地震のための募金活動の様子

成果

活動をきっかけに、多くの生徒や教員が災害や減災に関する情報を共有することができ、普段の生活の中でも、生徒の自発的な減災の取組が始まりました。実際、本校にはAEDが3台設置されており、現在救命講習受講生徒数は69名に達し、生徒が自ら非常時に備えています。

実践内容②

「経済活動と貧困」

ねらい：中高生と経済活動の関わりについて学び、「貧困」とは何かを理解します。

全校で総合的な学習の時間に、貧困の種類や自らの生活と貧困の関わりについて学び、各クラスでディスカッションを行いました。校外フィールドワークでは、名古屋市で月に1度開かれているフェアトレード・ツキイチマルシェを訪問し、出店していたお店の方々にフェアトレードに関する現状や取組などについてインタビュー調査を行いました。また、校内公募で集まったメンバーで、外部企業と連携し、名古屋国際オリジナルのフェアトレードコーヒーを製作して、9月19・20日の光楓祭（文化祭）で販売学習

を行いました。生徒自らフェアトレードのしくみを説明するチラシも作成・配布し、来場いただいたお客さんに対してフェアトレードの普及啓発を行い、SOCIAL ACTION! を実践しました。



フェアトレードコーヒーの販売の様子

成果

生徒たちは、貧困を解決する一つのしくみとしてフェアトレードを知り、普段の生活の中でも、フェアトレード商品を意識的に手に取るようになりました。また、この取組で関わったNPO団体が主催する街頭募金などにも自発的に参加しています。

実践内容③

「社会生活と循環」

ねらい：人間生活と環境の関わりを学び、自然との共生を実現する循環型社会を目指します。

全校で総合的な学習の時間に、「コンビニ弁当」を題材に、お弁当の中身はどこから来ているのか？など身近な事例から社会課題を発見し、環境問題に関わるフードマイレージの概念について基礎学習を行いました。また、夏休みには「環境保全・3Rに関するポスター」の作製に取組みました。ポスター作製にあたり、ゴミや環境問題についてリサーチし、メッセージ性のあるアイデアを形にしました。校内でのACTION!として、ペットボトルキャップの回収を行いました。生徒たちは、これまで学校でペットボトルとともに捨てられていたキャップを資源として回収

するために、手作りのエコキャップ回収BOXを作製し、全てのゴミ箱前に設置しました。こ



生徒が作製した環境・3Rポスター

このキャップは、光楓祭（文化祭）でキャップアートとして活用し、その後回収活動をしている団体に譲渡しました。

成果

活動を通して、ゴミの分別、資源の大切さ、「もったいない」について学び、学校や家庭、地域でも自発的にエコ活動に取り組むECO ACTION! が根付いてきています。

おわりに

これまでの活動が、ESDの取組として体系化され、再編成されてきたことは大きな成果です。総合的な学習の時間や特別活動を中心に、各教科教育や国際理解研修などの行事との連携を図り、生徒は学習内容を関連付けて考えることができ、理解度も向上しています。また、他学年の生徒や学校外の方々と会話をする機会が増え、コミュ

ニケーション力の向上に繋がっています。国際交流活動においても、英語でディスカッションできる生徒が増えつつあり、グローバル社会において社会問題の解決に取り組む人材が育っています。今後は、現行の活動をどのように継続・発展させていくか、新たなアイデアと体制づくりが課題だと考えています。

半田市立板山小学校



創 立：1874年
 住 所：〒475-0939
 半田市四方木町37-1
 連絡先：TEL 0569-27-5177
 FAX 0569-27-5690
 学級数：14 児童数：297人
 H P：http://itayama-school.jp



【交流先】 目黒区立 五本木小学校

創 立：1931年
 住 所：〒153-0053
 東京都目黒区
 五本木2-24-3
 学級数：12
 児童数：374人

交流概要

目的

板山小は、半田市の南西部、人口約七千人の田園地域に設置されている。その特長は、「緑に囲まれた森の学校」、「140年の歴史に裏付けられた地域との深い連携」、「各学年2学級50人程度のコンパクトな学校規模」にあるといえる。

こうした特長を「強み」として生かし、本校では従前から地域学習の研究に取り組んできた。その上において、ユネスコスクール（平成27年2月19日付け）への加盟が承認されたのを契機に、それまでの研究成果を、独自のESD活動（以下「板山ESD」という）として発展・展開させることとした。

そうした中で、本校がこの交流事業に参加した目的は3つある。

まず、この交流を通して「板山ESD」の実践を発信することにより、子どもたちの中から「板山ESD」を牽引するESDリーダーが育つことを期待した。「板山ESD」の今後の展開においてリーダーの育成は不可欠であり、この交流事業への参加は育成の機会として大きな可能性をもつものと考えた。本校の児童が有する穏やかな協調性の上に、加えてより広い世界へ向けた積極的な発信力、旺盛な好奇心を育成したいと考えた。

次に、都市部において本校と同様のテーマに取り組むユネスコスクールの活動と比較し、改めて児童自身が「板山ESD」の特長に気付き、今後の活動の方向を考える機会となることを期待した。そうした意味で、本校の立地とは大きく異なり、目黒区の住宅密集地域という環境にありながら、校地内にある「五本木の森」をみんなで守り、慈しむ五本木小の児童との交流は最適であると考えた。

3つめの目的は、都市部のユネスコスクールとの継続的な交流の足がかりをつくることである。本校では、将来的にインターネットやスカイプを用いた交流会議や、「児童ESDネットワークサミット（仮称）」を開催したいと考えている。今回の交流を、そのネットワークづくりのための第一歩としたいと考えた。



アイスブレイクで盛り上がる子どもたち

日程表

8月6日(木)	8:30 名古屋駅集合
	名古屋～新横浜～聖蹟桜ヶ丘
	13:30 「多摩市立多摩第一小学校」見学 聖蹟桜ヶ丘～市ヶ谷
	15:30 「JICA地球広場」見学 ～宿泊先へ移動 国立オリセン
8月7日(金)	宿舎から移動
	9:00 「目黒区立五本木小学校」交流 祐天寺～表参道
	13:30 「地球開発パートナーシッププラザ」見学 表参道～品川～名古屋



活発な意見交換をする子どもたち

内容

(1) 交流内容

本校からは、面接審査を経て選考された4～6年生児童代表8名、五本木小からは5年生11名が交流した。

五本木小の校長先生からの歓迎のご挨拶の後、アイスブレイクで子どもたちはすぐうち解け合い、距離があつというまに縮まった。

まず、本校児童がESD活動についてPPTを用いてプレゼンテーションをした。「140年の伝統があり、現在地に移転されて今年40周年を迎えたこと」、「大きな木々に囲まれた現在の森は、40年前の子どもたちが始めたドングリ作戦からつながっていること」、「この夏から、有志によるESDチャレンジャー隊の活動が始まったこと」などを紹介した。

説明の内容に対して、五本木小の子どもたちは、板山小の豊かな森の様子やチャレンジャー隊の活動について興味を示し、相次いで質問する姿が見られた。

次に、五本木小のプレゼンテーションが行われた。学校の紹介では、人工芝の校庭や室内の温水プール、学校行事や「五本木の森」が紹介された。板山小とは大きく異なる環境に、本校児童は率直に驚いた様子だった。特に、同校がESDの中心に据える「五本木の森」に関しては、VTRやポスターセッションなどで詳しい説明があった。本校の児童も積極的に質問を投げかけて、活発な意見交換ができた。

最後に、「五本木の森」の散策に出た。猛暑の中であったが、グループをつくり、五本木小の子どもたちが丁寧に森を案内してくれた。都会の町中の小さな森ではあるが、



五本木の森を散策する子どもたち

その中にはメダカがすみ、木々に掛けられた巣箱には小鳥が住み、五本木小の子どもたちが毎日手塩にかけて大切にしている森であることがよく伝わってきた。

(2) 成果

交流を通して、本校の特長や「板山ESD」の取り組みを子どもたちは自信を持って発信することができた。また、大きく環境の異なる東京の子どもたちと相互の取り組みを共有し、広くESDについての学びを深めることができた。短い時間ではあったが、本校の児童にとっては改めて「自分の住む町、板山」を見直す貴重な時間となったようだ。今回の交流を契機に、今後も引き続き交流を重ねる約束をして、五本木小をあとにした。

本校にとって、所期の目的を充分達成した素晴らしい交流になったと評価している。

参加した児童・生徒の声

- ・ つながることの大切さを学んだ。五本木小との交流のテーマは、「手をつなぐユネスコスクールの子」であった。五本木小とつながり、課題を共有することで、入学した時から当たり前のようであった板山小の森を改めて見つめ直すことができた。
- ・ 伝えることの大切さを学んだ。五本木小の友達は、自分たちが考え、行動したことを下の学年に伝えていた。自分たちの思いを、学年を超えて伝えていくことで、学校の森を誇りに思う気持ちが引き継がれていた。
- ・ 行動することの大切さを学んだ。自分はリーダーとなってESDチャレンジャー隊の活動をもっと活発にしたいと思った。五本木小では、地域のひとと協力して、「五本木の森」の土壌を守るための土作りをしていた。板山にもシニアの方たちで「板山っ子応援隊」が結成されたので、これまで以上に地域の方と力を合わせて活動したいと思った。

おわりに

今回の交流事業への参加は、本校児童にとってESD活動への大きなモチベーションとなり、「板山ESD」の推進に大きな意味を持つものとなった。参加した児童だけでなく、児童全体が自信と活力を得たよう思われる。秋には、子ども交流シンポジウムも開催できた。

ESDカレンダー（授業）から、ESDチャレンジャー隊に

よる課外活動へ、そして地域ではシニアによる「板山っ子応援隊」の創設と、「板山ESD」は学校から地域へと広がり、世代をつなげ、地域がつながり始めている。

今後は、今回の交流事業で得た知見を生かして、さらに全国、世界のユネスコスクールとつながり、「板山を思い、世界を思う」板山っ子を育てていきたいと考えている。

豊田市立藤岡南中学校



創 立：2011年
 住 所：〒470-0431
 豊田市西中山町蔵屋敷86番地1
 連絡先：TEL 0565-76-2410
 FAX 0565-76-2420
 学級数：15 生徒数：404人
 H P：http://www2.toyota.ed.jp/
 swas/index.php?id=c_fujiokaminami



【交流先】 大田区立 大森第六中学校

創 立：1947年
 住 所：〒145-0063
 東京都大田区
 南千束1-33-1
 学級数：12
 生徒数：361人

交流概要

目的

本校は、今年で創立5年目の学校である。ちょうど、東日本大震災のすぐ後に開校したこともあり、校訓を「ともに生きる」とした。「地域を中学生が支えていく」「地域のなかで自分たちに何ができるのか」を考えて、1年目から取り組んできた。

本校の屋上には太陽光パネルがあり、壁面には緑のカーテンを設置している。また、海を渡る蝶であるアサギダラの飼育・観察や捕獲・記録をすることで環境学習を行っている。愛・地球博記念公園でアサギダラが蜜を吸うフジバカマの植苗にも参加した。今後記録したアサギダラが渡っていった国々と交流ができるとよいと考えている。

地域との交流として、1年目から「ふれあいフェスティバル」の名前で交流館や公民館と共催で文化祭を行っている。各学年ESDに取り組んできたことと関連させた模擬店を出している。1年は米作りに関すること、2年は防災や職業体験、3年は食べ物の製作・販売などである。地域の方や卒業生たちも多数参加するので、地域の方とのふれ合いが深まるフェスティバルである。

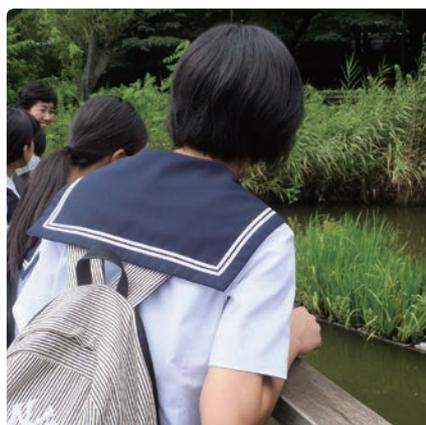
他にも地域と支え合う活動として、地域合同防災訓練と防災キャンプがある。これは、震災が起こった際に、中学生は地元で一日中生活しているため、地域の助けとなる

ことができるという理由からスタートした。「『助けってもらう人』から『助ける人に』」をスローガンに、地域合同防災訓練では災害時に向けて、消火・救急救命訓練・土のう・簡易トイレ作りといった活動を消防団や交流館、市役所の防災対策課などとともにやっている。防災キャンプでは中学校が避難場所になることを予想し、避難所運営を市役所の防災対策課や上下水道課、消防団、トヨタ自動車などに協力していただいている。

本校は、このようなこと以外にも「ともに生きる」の校訓のもとさまざまに活動しているが、創立から5年経った今、ESDの活動を整理し、「無理なく、継続的に、生徒や教師が替わっても続けていくために、どのようにしていくべきか」を考える必要があった。そこで今回の「ユネスコスクール国内交流派遣」に応募させていただいた。交流をお願いした大田区立大森第六中学校は、ユネスコスクールの先達としてさまざまな活動を行っており、本校の今後の進み方を思索する上でぜひ学ばせていただきたいと思いお願いした。また、国連大学にも訪問させていただき、ユネスコの意義や組織作り、地域の中で中学生にどんなことができるのかなどについてお話をいただこうと考えた。



南中の防災キャンプの様子



第六中の洗足池水質浄化活動の見学

日程表

	8:30 名古屋駅集合 名古屋～品川～洗足池 10:30 「大田区立 大森第六中学校」交流 洗足池～渋谷
8月10日(月)	15:00 「国連大学」見学・講話 ～宿泊先へ移動 国都内ホテル
8月11日(火)	ホテルから移動 表参道～品川～名古屋

内容

大森第六中は、地域に出るボランティアや駅前に花を植えるボランティア、カンボジアの地雷撤去のための活動、近くの洗足池での空心菜を使った水質浄化活動などさまざまな活動を行っている。その中で今回は防災教育を中心に行った。

まず、互いの中学校の全般的活動についてパワーポイント

を使って紹介をし、防災教育でどのような内容のことは行っているかの詳細を紹介し合った。その後、それぞれの活動の質疑応答を行った。

大森第六中学校は、『学校を逃げ込む場所から、立ち向かう場所に』という合言葉で学校避難所開設訓練に取り組んでいる。ここでは、実際に震災にあつたときに対応できるように具体的な場面を想定し、緊急電話対応や避難誘導といった訓練を行っている。震災時の対応以外にも、普段から震災に備えるという観点で、ヘルメットの常備を行っている。一人一人の生徒のイス下にネットでヘルメットをくりつけ、通常の避難訓練でも全校生徒がそのヘルメットをかぶって行うことができるようにしている。どんな時でも対応できるように意識付けされていると感じた。また、北欧の大学から寄付された「折り紙式テント」では、避難してきた方が他人の目を気にせずに着替えをしたり、授乳をしたりすることができるように配慮されている。南中の生徒たちも体験させてもらった。地震放送が入った際に、誰でもすぐ頭を保護することができるように工夫されたへ



震災時のヘルメットと折り紙式テント



ルメットは、実際に南中でも採用できないかという声があり、よりよいヘルメットの設置方法はないか等を話し合った。南中の防災キャンプについての質問では、生徒や学年教員が何も情報を与えられていない状況で、避難者が次々に避難してくるという「リアルHUG」について、一番大変だったことは何か、どういう状況が想定されるのか、地域の方たちに避難者として協力してもらおう際にどのように動いたかなど、大森第六中で活用するための情報を交換し合った。

その後、さまざまな分野に広がっている大森第六中の活動が、教員や生徒会などが全てを把握した上で、無理なく継続的に続けることのできている理由を教えていただいた。各学年の級長会や生徒議会の他に、月一回、生徒会と各学年代表、各委員長、関係部活の部長、ESD担当教員が参加しての「ESD委員会」を行い、各活動の動きや企画・検討といった全体の把握をすることのできる組織が作られている。こうすることによって、全学年や委員会、部活動、教員全体がESDの動きを認識してそれぞれ活動することができるということがわかった。

参加した児童・生徒の声

- ・南中は、学年や委員会活動、ボランティアなどでさまざまな活動を行っているが、継続していくという点で難しいと思う部分があった。しかし、第六中の組織や活動を聞いて、今後の南中の組織作りについて考えることができた。やはり縦のつながりと横のつながりを考えていかないと、持続し広げていくのは難しいと感じた。
- ・第六中は、部活動や委員会、ボランティアなどで、生徒たち自身が自分たちの活動の意味や動きをよく理解して活動しているので、南中でもやってみようと思った。

おわりに

本校は、創立から5年間、さまざまな取組を行ってきた。生徒たちも地域や社会の中で自分たちにできることを考えて、やりがいをもって活動をしてきてくれた。しかし、ともに突っ走ってきた生徒や教員も替わり、次のステップに変化していかないといけない時期にきたと感じる。その中で、どの代の生徒でも新しく赴任してきた教員でも、これまで

やってきたことの意義を理解し持続していくために、さらに発展させていくために何が必要かを考えていかなければならない。今回の大森第六中との交流、国連大学でのお話をうけて、方向性が見えてきたと感じる。南中のESD活動がより深化・発展していくためにも組織作りから考えていきたと思う。

愛知県立愛知商業高等学校

愛商

創立：1919年
 住所：〒461-0025
 名古屋市東区徳川一丁目12番1号
 連絡先：TEL 052-935-3480
 FAX 052-935-3470
 学級数：21 生徒数：829人
 H P : <http://www.aichi-ch.aichi-c.ed.jp/index.html>



【交流先】 福島県立 安達高等学校

創立：1923年
 住所：〒964-0904
 福島県二本松市
 郭内二丁目347
 学級数：17
 生徒数：666人

交流概要

目的

愛商ユネスコクラブは、2011年より校舎屋上で都市型養蜂の実証実験を行っており、ミツバチを核に環境まちづくり、観光まちづくり、被災地との交流など多分野にわたって活動している。活動の一つとして、屋上で採れた「徳川はちみつ」と陸前高田市の特産品「米崎りんご」を使用した復興応援アイス「希望のはちみつりんご」を開発し、継続的にアイスの販売、陸前高田との交流を行ってきた。

今年度の新たな取り組みとして、原発事故による被害を受けた福島県に着目した。福島について調べていくと警戒区域に指定されている地域や、瓦礫の撤去が続く地域があると知り「福島のために何ができるか」と考えるようになった。そこで「はちみつりんご」の開発で学んだノウハウを生かし、福島の魅力を発信できるアイスを開発することにした。

そしてできたのが、福島に幸せを届けたいという思いを込めた復興応援アイス「幸福のはちみつブルーベリー」。このアイスには「徳川はちみつ」と福島市飯坂町にある安齋

果樹園で生産された、100%オーガニックのブルーベリーを使用し、売上から1個につき8円が「東日本大震災ふくしま子ども寄附金」にあてられる。

今回福島を訪問するにあたり「幸福のはちみつブルーベリー」の試作品をお召し上がりいただき、福島の方の思いも取り入れたアイスを完成させたいと考えた。

その中で、福島県唯一のユネスコスクールである福島県立安達高校との交流を通し、現地の高校生が復興に向けてどのような思いで活動を展開しているのかを知り、思いを共有したいと考えた。さらに、地域の方や生徒に学校周辺が安全であることを証明するため、校内の放射線量の測定を行うなどの活動を積極的に取り入れている高校生と意見交換を行うことで、福島の魅力や原発・放射線についての知識を深め、自分たちの言葉で発信していきたいと思う。そして、持続的に交流を続け、心のつながりを強めていくと同時に将来を担う存在である私たち高校生が、共に復興に向け考えていきたい。



「幸福のはちみつブルーベリー」アイス



自然科学部の皆さんと放射線量測定の様子

日程表

7月21日(火)	7:00 名古屋駅集合 名古屋～東京～福島
	12:40 「環境省除染情報プラザ」 14:00 「福島市役所東部支所」 放射能検査の研修
	15:00 「被災地視察」(バス車窓) 相馬～南相馬～飯館～福島 ㊦ 福島市内ホテル
7月22日(水)	ホテルから移動 8:30 「安齋果樹園」訪問～仮設住宅慰問 13:30 「安達高等学校」交流 ～宿泊先へ移動 ㊦ 郡山市内旅館
	9:00 「グランシア須賀川」 (屋上養蜂場にてミツバチ見学等) 郡山～東京
7月23日(木)	15:00 「わたす日本橋」 (三井不動産東北復興支援プロジェクト) 16:30 「銀座ミツバチプロジェクト・紙パルプ会館」 東京～名古屋

内容

安達高校との交流会ではそれぞれの学校が取り組むESD活動についてプレゼンテーションを行った。自然科学部の皆さんは、温度差を利用した発電などエネルギーの分野でESD活動を展開しており、異なる視点で活動する私たちは、多くの学びを得ることができたと感じている。そして、私たちが取り組むESD活動や「幸福のはちみつブルーベリー」に込めた思いなどについてもプレゼンテーションを行い、安達高校の皆さんと思いを共有することができた。

「はちみつブルーベリー」の試食会では「福島のブルーベリーを使ってくれてとても嬉しい」「学校の購買や福島でも販売してほしい」と笑顔で話していただき、アイスに込めた私たちの思いを伝えることができたと考えている。

また、自然科学部の皆さんが震災直後から行っている校内の放射線量の測定に参加した。「測定を継続することで、地域の方々に安心を届けことができ、地域貢献につながっている」という言葉を受け、福島の高校生が復興に向け前向きに進んでいると知ることができた。

安齋果樹園を訪問した際には、震災当時の様子についてお話をいただいた。私たち自身、風評被害を受けていることは知っていたが、売上が激減し、福島県外の人から「福島のフルーツならいらない」と直接言われるなど、被害の大きさは想像をはるかにこえるものだった。安齋さんは「福島の食材は検査をしているから安全だと知してほしい」とおっしゃっており「はちみつブルーベリー」に私たちの思いと



安達高校の皆さんとの集合写真

共に、福島の方の思いも乗せ届けていきたいと強く感じた。

帰還困難区域に指定され、故郷に帰ることのできない浪江町の方が暮らす仮設住宅を訪問した際にも「はちみつブルーベリー」を食べていただいた。そこでは、私たちが笑顔で歓迎していただき、福島の方々の温かさを肌で感じることもできた。

福島を訪問したことで、部員一人ひとりの活動に懸ける思いは大きく変化した。直接お聞きした現地の方の思いは、現在の私たちの活動に大きく生かされている。「はちみつブルーベリー」の販路拡大のため、企業にお伺いする際、私たちの思いと共に現地の方の思いも私たちの言葉で伝えることができています。そして、販売店舗は名古屋市科学館をはじめ7店舗となり、本年の販売予定数1500個を完売することができました。

参加した児童・生徒の声

- ・今回福島を訪問し、原発がもたらす被害の大きさに衝撃を受けることもあったが、自分には関係ないと思っていた原発や放射線について深く考える機会になった。また、家族や友人に囲まれて何気なく送る毎日がいかに幸せなのだと改めて感じた。
- ・震災から月日がたった今も、福島について放射線などのマイナスイメージを持っている方もいると思う。確かに私が見た福島は、復興を果たしている地域もあったが、県全体が「復興した」と言える状態ではなかった。しかし、実際に訪問した私は「福島は復興に向けて前進している、笑顔溢れる場所だ」と自信を持って言える。
- ・自分一人の力は小さく何の役にも立たないかもしれない。多くの人の考え方をを変えることは不可能かもしれない。しかし、どんなに小さなことでも、継続すれば必ず大きな力になると信じて、福島で見たもの、聞いたことを発信していきたい。

おわりに

私たちの活動は多くの方に支えられ、一歩ずつ前へと進み始めた。安達高校との交流を通し、復興に向けて前進する福島の今を伝えていきたいと強く感じた。また、同じ高校生と意見交換を行い思いを共有できたことで、今後も交流を継続していきたいと考えている。そして現在、私たちにできる復興応援の一つとして「はちみつブルーベリー」

に続く、福島シリーズ第2弾のアイス開発を企画している。福島県産のフルーツを使用した、新商品の開発が実現すれば継続的な復興応援が可能になり、「フルーツ王国」としても知られる福島の魅力を発信できると考えている。

今後も福島の幸せを願い、現地で出会った多くの方との絆を大切に、活動を行っていく。

愛知県ユネスコスクール交流会

ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子どもたちが学び合いました。ユネスコスクールを中心とした小学校から高校までの児童生徒や教職員等約300名が集い、活動発表や意見交換を行い、ワークショップには延べ500名ほどの参加がありました。

ここに集った子どもたちの輝く笑顔は、ESD活動の大切さと未来への希望を広く発信してくれました。

日時 平成27年10月10日(土) 正午から午後4時

主催 愛知県教育委員会

後援 日本ユネスコ国内委員会、ユネスコ・アジア文化センター、中部ESD拠点協議会

交流会次第 13:00～16:00

地球市民交流センター 体験学習室

13:00～13:05	開会行事
13:05～13:35	基調講演 演題／「今日よりいいアースへの学びとは」 講師（ファシリテーター）／NHK解説委員 早川 信夫 氏
13:35～14:20	ユネスコスクール活動発表 名古屋市立内山小学校 テーマ：防災 岡崎市立新香山中学校 テーマ：環境 名古屋国際高等学校 テーマ：減災、フェアトレード、環境
14:20～14:30	休 憩
14:30～15:15	ユネスコスクール国内交流活動発表 半田市立板山小学校（東京都目黒区立五本木小学校と交流） 豊田市立藤岡南中学校（東京都大田区立大森第六中学校と交流） 愛知県立愛知商業高等学校（福島県立安達高等学校と交流）
15:15～16:00	パネルディスカッション テーマ／「持続可能な社会のために」 パネリスト／名古屋市立内山小学校、半田市立板山小学校 岡崎市立新香山中学校、豊田市立藤岡南中学校 名古屋国際高等学校、愛知県立愛知商業高等学校 ※各校代表者1名 ゲスト／ユネスコ・アジア文化センター 松尾 奈緒子 氏 コーディネーター／NHK解説委員 早川 信夫 氏

ポスターセッション 12:00～12:45

地球市民交流センター 体験学習室前

12:00～12:15	小学校…長久手市立東小学校、あま市立甚目寺小学校 中学校…岡崎市立竜南中学校、豊橋市立南部中学校 高 校…名古屋市立山田高等学校、名古屋市立名東高等学校
12:15～12:30	小学校…東浦町立緒川小学校、岡崎市立城南小学校 中学校…愛知教育大学附属岡崎中学校、名古屋国際中学校 高 校…名古屋市立名古屋商業高等学校、中部大学第一高等学校
12:30～12:45	全12校フリータイム

愛知県立愛知商業高等学校

「ミツバチからのメッセージ～貧困・環境問題について考えよう～」
 ・ミツバチについての説明 ・画用紙にメッセージを書いて模造紙に貼付
 ・四季の花のはちみつ味比べ ・世界の現状やフェアトレードの説明
 ・保護服の展示 ・フェアトレード商品の展示
 〈販売〉アイスクリーム

名古屋市立名東高等学校

「各国の家庭で食べる食材で世界を知ろう！」
 各国の食卓から世界の今を知る体験型授業。どんな国のどんな家族がどんなものを食べているどう違うのか見て、聞いて、話して、考えて発見した。

名古屋市立名古屋商業高等学校

「おえかきボタンを作っちゃおう！」
 葦(あし)から作られた布に好きな絵を描き、それを“くるみボタン”に仕立ててプレゼントした。
 〈販売〉葦布の三角巾・ポシェット・ポケットティッシュカバー

中部ESD拠点協議会
(中部大学)

「間伐材を利用したものづくり」
 愛知県豊田市足助町の間伐材を材料とし、のこぎりや接着材等を用いて、各種のパズルや音の出る木製品等を制作した。



早川氏の基調講演



ユネスコスクール活動発表



ユネスコスクール国内交流活動発表



パネルディスカッション



ポスターセッション



ワークショップ

参加申込校

尾張旭市立旭小学校
 長久手市立東小学校
 北名古屋市立師勝小学校
 犬山市立東小学校
 あま市立基目寺小学校
 半田市立板山小学校
 半田市立有脇小学校
 東浦町立緒川小学校
 東浦町立藤江小学校
 岡崎市立城南小学校
 岡崎市立竜南中学校

岡崎市立新香山中学校
 豊田市立土橋小学校
 豊田市立藤岡南中学校
 豊田市立前林中学校
 豊橋市立松山小学校
 豊橋市立西郷小学校
 豊橋市立福岡小学校
 豊橋市立松葉小学校
 豊橋市立岩田小学校
 豊橋市立野依小学校
 豊橋市立北部中学校

豊橋市立東陽中学校
 豊橋市立南部中学校
 豊橋市立南稜中学校
 豊橋市立青陵中学校
 豊橋市立前芝中学校
 豊橋市立東部中学校
 愛知県立愛知商業高等学校
 愛知県立安城東高等学校
 愛知県立半田東高等学校
 名古屋市立内山小学校
 名古屋市立宝神中学校

名古屋市立山田高等学校
 名古屋市立名東高等学校
 名古屋市立名古屋商業高等学校
 名古屋市立名東小学校
 名古屋市立北高等学校
 中部大学第一高等学校
 豊橋中央高等学校
 名古屋国際中学校・高等学校
 愛知教育大学附属岡崎中学校

(順不同)

当日の参加者の声

今日の交流会についての感想

小学生	今日、交流したことで自分たちでも問題を考えていかないといけないことがわかりました。私たちはわかっていない、絶対おきない、このような考えを思うのではなく、私たちはいつでもかかわりあっているそういう考えが必要になってくると思いました。このような考えで今後の未来を動かすのではないかと思います。
中学生	私はあまり環境や自然について考えたことがなく、ESDも知りませんでした。今回は様々な活動の様子を知り、自分からESDについて考え、活動していることが大切だと思いました。私たちの学校では、ESDについて活動していないので、自分の学校や地域の環境の良さを見つけ、学校、地域全体で行動していくことが必要だと思いました。
高校生	他の学校が行っていることを具体的に例で挙げ、質問したりされたりすることでとても刺激になった。自分一人の意見だけの狭い視野ではなくより広い視野で考えることでできそうだと感じた。考えを深めることで、より周りのためになる良い行動選択が可能になると思うのでとても良い機会だった。一つの課題においていろいろな取組をやっていると聞いて、より具体的に、何をすべきかなどがわかったような気がした。同じくらの年の子の意見を聞いて、すごく楽しかった。内容が濃く良い時間だった。このことをもっと地域社会に広めてもよいと思う。
教職員	各学校がどのような取組をしているかがよくわかりました。自分の学校でのこれからの活動の参考にしていきたいです。ユネスコスクールと言っても、学校がどのような取組をしているか生徒もまだまだ把握していない子が多く感じるのでこういった交流の様子を思い浮かべながら、活動をしていきたいと思えます。
教職員	本年度ユネスコスクールに加盟し、ユネスコスクールが「一体なんなのか」ということがあまり分かっていなかったもので、この交流会でいろいろな学校の発表を聞くことができて本当に良かったです。様々な学校の取組を知るとともに、子どもや教師のまっすぐな姿勢に本校の児童も教員もとても刺激を受けました。学校に帰ったら、今日得たものをどんどん発信し、活かしていきたいと思えます。ありがとうございました。

ユネスコスクールやESDの活動の充実のために、必要だと思うこと

小学生	次の世代の子供たちに私たちがやったことを引き継いでもらう。次の世代次の世代と結びついて世界につながってみんなでESD活動。
中学生	「ユネスコスクール」や「ESD」を全く知らない人が多いと思うのでまずどういうものかたくさんの人に知ってもらい必要があると思えます。理解してもらったうえで学校、校区で小さなことから少しずつ行動をすればいいと思えました。
中学生	知識とやる気！そして想い！
高校生	この経験を通して、自分たちの学校でも何か地域のために自分たちができることは何かということを考える必要があると思えます。また、環境問題や世界状況などをテレビや新聞を読んで家族の会話でもそれを取り入れて考えを深めていきたいと思えます。
教職員	教育活動の中でいかに時間をくりだせるか。やる気のある教員だけでは、どうしようもない。学校全体でも取組を充実させなくてはならない。
教職員	背伸びしすぎずにできることから始め、コツコツと継続していく。活動を学校の外にいろいろな形で発信する啓発活動が裾野を広げることにつながる。
保護者等	各学校によって活動の熱心さや思い入れに差があるように思えます。もっと活動を多くの人たち伝えられるといいと思えます。(知名度が低いと思う)



会場の様子 (ポスターセッション)



会場の様子 (ワークショップ)



会場の様子 (交流会)

ユネスコスクール活動事例集 第3集

平成28年3月発行

愛知県教育委員会生涯学習課

〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電話 052-954-6780 (ダイヤルイン)

ファックス 052-954-6962